

逆井孝仁先生記念号によせて

逆井孝仁先生は、1958年9月に同志社大学経済学部助教授から本学経済学部助教授として迎えられ、以来1991年3月定年退職されるまで、32年6カ月の長きにわたって本学ならびに経済学部の発展のために尽力され、学問の府としての本学の名声を大いに高められました。

先生は、経済学部において日本経済史の講義を担当され、他学部も含めて多数の学生の教育にあたられる一方、ゼミナール・大学院における研究指導を通じて、外国人留学生を含む多くの研究者の育成に努められました。この間、1969年9月から71年3月まで経済学部経済学科長、1973年4月から75年3月まで経済学部長兼大学院経済学研究科委員長、1985年4月から87年3月まで大学院経済学研究科博士課程後期課程主任などを歴任され、経済学部および大学院の発展に尽力されました。とくに、経済学科長・経済学部長在任中は、「学園紛争」のなかで経済学部の教育・研究体制の改革に情熱をもって取り組まれました。また、1975年7月から退職される91年3月までの15年8カ月という長い期間にわたって立教学院評議員を務められ、学院の発展のためにも多大な寄与をなされました。

先生の研究業績は、「近世幕領における人口政策の一考察」（1954年）以来の多数の著作に示されておりますが、それは日本の近世経済史研究と近世経済思想史研究の二系列に大別することができます。前者の系列に属する「『寄生地主制』研究に関する一考察」（1963年）は、当時学界の関心を集めていた「寄生地主制」研究に方法論上の再検討をせまったものとして高く評価されております。また、『日本経済史論』（御茶の水書房、1967年）や『日本経済史』（有斐閣、1982年）などの著書も、独自の鋭い分析視覚から近世経済史の研究動向に一石を投じたものとして注目を集めました。後者の系列に属する近世経済思想史の研究は、安藤昌益論（「安藤昌益の封建制批判とその背景」、1955年）をもって始まりますが、その後先生の研究上の主要な関心は石田梅岩の「石門心学」に傾斜し、「石田梅岩の思想とその背景」（1961年）、「石門心学の意義と限界」（1965年）、「石田梅岩における通俗道德の成立」（1978年）、「石門心学における実践倫理の転回」（1980年）などの著作を次々に世に問われ、学界での高い評価を得ております。先生の近世経済思想史研究は、西欧の近代化との比較という視点を保持しながら、現実に生起する諸問題を常に念頭において日本の「近代化」を批判的に検討するという極めて幅の広い視覚からのものでありましたので、研究の対象は個別の思想家にとどまらず近世経済思想史全般に及び、「経済の発展と経済思想」（1978年）や経済学史学会編『日本の経済学』（東洋経済新報社、1984年）所収の「明治以前の経済思想」などの優れた著作を生むに至りました。すなわち、そこでは熊沢蕃山、山鹿素行、荻生徂徠らの「前期経世論」、石田梅岩の「商人の経済思想」、海保青陵、本多利明、佐藤信淵らの「後期経世論」（重商主義）あるいは三浦命助の「『民富』思想」などが、幕藩体制下の商品経済の発展との関連のもとに、明治以降の日本

の「近代化」をも射程に収めながら体系的に叙述されており、日本の近世経済思想史の研究水準を著しく高められました。また、先生が中心となられて編集された『日本の経済思想四百年』（日本経済評論社、1990年）や最近の著作である「河上肇における日本経済思想史研究」（1991年）も、そうした先生の学問の幅の広さを語って余りあるものといえます。さらに旧版岩波講座『日本歴史』（1964年）に執筆された「近世史研究解説」をはじめとする研究史の整理を目的とした著作においても、先生は学界に対して数々の有益な問題を提起されております。このようにして、先生は日本の近世経済史および近世経済思想史研究の発展に大きな足跡を残し、その諸業績は学界の共有財産として受け継がれていくことと確信します。

先生の学会での活躍もまた刮目に値します。経済学史学会、日本史研究会に参加されるとともに、1973年以来石門心学研究会評議員・理事を務められました。また、1983年からは日本経済思想史研究会代表として、日本経済思想史研究の発展と後進の育成に努められております。

このように先生は、本学経済学部教授として、当該諸学会において目覚ましい活躍をなされ、大学としての本学の権威を一層高めることに多大の貢献をしてられました。

立教大学は、先生の学術上、教育上の功績の顕著なことにより、1991年7月、先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが、経済学部発展に尽くしてられました先生のご功績を永くとどめるために、本号を先生の記念号といたします。

先生の今後のご健康とご活躍を祈念すると同時に、これまでと変わらぬご助力を本学と経済学部のために賜りますようお願い申し上げます。

1991年10月

経済学部長 丹 羽 克 治